

表へボー……。

『何やあの客は。』……帳場が

『伊八どん、今のお客さんわいな。』

『もうお歸りに成りました。これくスふ云ふお遊び方です。』

『ウム。唯の御方やあるまい、あと隨つて見い。』

『へエツ。』

伊八が見え隠れて隨つて往きますと、もうズンブリ暮れた新地の中を例の風呂敷包みを首筋へ括り附けて、裕くりした足取りで南へチャラく。今橋筋を東へ曲つて鴻の池の御本宅。表の戸をトントン。くくく。

『え、誰方で。』

『あゝ俺しぢや。』

『おゝ旦那さん。唯今お開け申します。』

其時分の御大家は皆通り庭でムりまして、中庭と玄關と表と、三つ入口が附いて御座ります。ガラくくく。ガラくくく。ガラくくく。

『へえお歸りやす。』

『お歸り遊ばせ。』

『へえお歸り。』

『大儀ぢや。あとを閉めとくなされ。』

ガラくくく。ガラくくく。ガラくくく。

『はしてナ。誰方やろな。鴻の池の旦那は時々見えるさかいお顔を知つてるが。あのお方とは違ふ。

あれ丈け皆が丁重にしゃはるのは御親類かいナ。一遍訊ねて見たろ。』 トンく。トンく。

『誰方。』

『夜分恐れ入ます。北陽の綿富の若い者で。小々物をお伺ひ申し度う御座りますので。』

『何ぢや。綿富の若い物か。』

表戸の横に臆病窓と云のがムります。それをスーツと開けて

『何や、お前伊八や無いかい。』

『おツ。これは、夜分御面倒な事を。』

『待ちや、今開けたげる（ガラくくく）さ。這入り。』

『へツ。御免やす。へ今晚は。へ今晚は。いやお揃ひで。へ誰方さんも今晚は、今晚は。』

『何やいな今時分に。』